

教職課程と別府昭郎

別 府 昭 郎

もうそろく

定年退職（2016年3月31日）はようやく我が身にせまってくる。43年勤めた明治大学を去る日が目前に迫っている。定年退職は私の「なかじきり」と位置づけていい。漢字でかけば、「中為切」であろう。「来し方」をふりかえり、「行く末」を考えるいい機会と言わなければならない。「なかじきり」が総決算になってしまっていて、「行く末」はないかもしれない。もしそうであったとしても、「行く末」のことを考えておくことは無駄ではなかろう。定年退職後の人生が酔生夢死にならないためには、「行く末」も考えておく必要があると思う。

I 来し方

○ 明治大学教職課程に就職した時の世相

1973（昭和48）年4月1日づけで明治大学教職課程の教員になった。教員になったといっても、2年間は助手（現在の院生が助手になるシステムとは根本的に違う。正規の教員としての助手）をした。私が明治大学に採用されるキッカケを作って下さったのは故野邊忠郎教授である。赴任する前年2月に連合赤軍による「あさま山荘事件」があった。「あさま山荘事件」は朝から晩まで、広島日赤の病室で同室の守屋さんのテレビで見た。

明治大学大学の教員となったときの首相は田中角栄であった。その後彼は政治献金問題で首相を辞めた。ロッキード事件で逮捕され、裁判にかけられた。担当検事は堀田力氏であった。角栄が首相を辞めた後、椎名裁定で明治大学出身の三木武夫氏が首相になった。

NHK大河ドラマは『国盗り物語』を平幹二郎主演でやっていた。明治座で先代松本幸四郎、市川染五郎（現松本幸四郎、松たか子や現市川染五郎のお父さん）が出演しているのを、明治大学の観劇会で野邊先生の奥さんと見た記憶がある。結婚する前であった。

歌謡曲では、納谷広美前学長（現学事顧問）がカラオケでよく歌われる渡哲也の「くちなしの花」がはやっていた。翌、（1974）渡哲也はNHK大河ドラマ「勝海舟」の主役に抜擢された。渡哲也が病気で降板した後は松方弘樹が引き継いだ。渡哲也はテレビやラジオのコマーシ

ャルで「話題の人渡哲也」とよく言っていたのを覚えている。

○ 野邊忠郎先生

明治大学に採用される切っ掛けを作って下さったのは日南市出身の故野邊忠郎教授であった。同じ宮崎県出身ということで、親しみをもたれたのであろう。よく『大学史通信』に書いた位の論文で採用されたと思う。他の人もそうであったから、大学教師の採用は厳しかったのには変わらないが、今ほど採用条件が厳格ではなく、そういう意味ではまだまだ牧歌的な時代だったのであろう。採用される時、野邊先生は、「学長や学部長になりたかったら、教職課程の教員にならないことだ」と言われた。私は、当時「採用が決まったばかりなのに、変なことを言う先生だな」と胸臆で思ったが、黙っていた。今になってその意味がよく分かる。分かりすぎるほどだ。当時先生よりもはるかに運営能力も教育能力も劣る者が重要な役職についていたのである。学部の教員は、教職課程の教員は畢竟するに教育技術の先生であって、一段低い者と見なされていた。学長や学部長などの大学や学部の役職には、いくら能力があっても、つけない慣行になっていた。そのことを言われたのであると思っている。実際に「はみ出し者」と自嘲気味に言った先生もいる。ここに意図せざる「差別」が生まれる温床がないとは言えない。

野邊先生は、私がこれまで出会ったどの大学教授よりも教育力を持っており、教育熱心であった。総合的な人間力があつた。人間的魅力があつた。「教育にたいする激しい魂」と「行動の度胸」を強く感じた。大学の教師は授業はあまり上手ではないという私の通念を覆すのに十分な授業をされた。多くのことを学ぶに値する先生であつた。現に学んだ。

授業上手は先生の経歴と無関係ではないだろう。先生は宮崎県での小学校・中学校の教師、福岡県での中学校の校長を経て、大学・大学院で学び、大学の教師となられた。そういう経歴があつたのでひと味も二味も違った大学教師になられたのであろう。野邊先生の大学教師としてのあり方が私のモデルとなった。具体的に言えば、チョークも黄色と白の二色しか使われなかったし、導入の仕方、新しい教材の提示の仕方、授業の終わり方、学生との対応の仕方、大学教師としての考え方など大学院で学べないことをたくさん学んだ。今でも精神的財産となっている。しかも全く同じ時期に明治大学の教員となった三上昭彦氏と私を自分の部屋に入れ(当時は複数の教師が同部屋であつた)、先生の教育観を聴きながら、よく昼食をご馳走になった。三上昭彦氏も私も「ハイそうですか」と言うことを素直に聞く人間ではなかったので、先生も二人の扱いに苦勞されたと思う。「君たちを説得できないようでは、僕の教育論の真価が問われる」とよく言っておられた。

野邊先生は表面的には矛盾したことも言われたが、どだいそれらを統一的に理解することは非常に困難であつた。だから一面的なレッテルを貼るよりも、言われたことは言われたことと

してそのまま受け取った方が自分の精神的財産が増えることに気がついた。一時は三木清ばりに「野邊忠郎における矛盾の研究」を考えたこともあったが。

人は野邊先生を「田舎武士」とあだ名していると教えてくれたのは、「ひょうたんなまず」とあだ名される先生であった。私は、「田舎武士」の方が「ひょうたんなまず」より人間であり、武士であるだけまだましだと思った記憶がある。レッテル貼りをしても何も生み出さないと考えたからである。念のために言うておくが、私は武士が偉いと考えている封建主義者ではない。

あだ名（レッテル貼）はともかく、野邊先生との出会いが、大学の歴史に大に関心をもっていた私に大学教育にも興味を持たせた重要な契機であった。

もし、野邊先生との出会いがなかったならば、今日の自分はなく、別の大学の教員になっていただろう。そして人間的には、今ほど成長していないだろう。自分は運命論者ではないが、そこ不思議な運命を感じざるをえない。今でも変わらず尊崇の念を抱き続けている。

○ 教職課程における私の仕事

初めは教職課程の助手として教育実習だけを担当した。地図（この地図が今手元にあれば個人的には大変な価値がある）を片手に、足立区・大田区、品川区などの大学から遠い地区の教育実習を引き受けてくれた全ての中学校（協力校）を回った。ほかに練馬区や葛飾区の一部の中学校も担当した。仕事の中身は、①その学校で実習をする予定の学生から誓約書に署名してもらい、捺印をもらう、②その書類を学校に持って行き、校長の承諾印をもらう、③その書類を区や市の教育委員会に持って行き教育長の印をもらう、④それを東京都の教育委員会に持って行き、都教育長の承認印をもらう、⑤それを大学にもって帰る、⑥そして学校で実習をする学生の研究授業を見て、講評をする、学校によっては、放課後行われる反省会に出ることもあった。学校が多くて回りきれないときには、研究授業でない普通の授業を見ることもあった。教育実習の実務について丁寧に教えてくれたのは菅原徹先生であった。

教育実習を担当したおかげで、「堀切菖蒲園」にも行くことができた。大田区と川崎市のあいだにある「矢口渡し」（多摩川）も見た。かの「吉原」がいま「千束」と呼ばれていることも「千束中学校」にいったときに分かった。浅草にも行くことができた。落語に出てくる「飛鳥山」で桜を見ることもできた。永井荷風の「日和下駄」やちばてつやのマンガ「あしたのジョー」で知られる「言問橋」も見た。蓬萊中学校に行ったとき、山谷も見えてきた。五日市中学校に行ったとき「五日市憲法」をも見ることもできた。明治の人々の精神は現行「日本国憲法」を先取りしている部分もあると感心した。大田区、品川区、足立区、荒川区の各区役所、青梅市や東久留米市（現在西東京市）、清瀬市の市役所にも行った。こうして教育実習を担当した余録は大きい。研究以外の仕事は雑務という観念があるが、雑務と思わずに、自己の役にたて

る知恵も必要だろう。

○ 教職課程教員の性格

教職課程の教員は二重の性格を持っている。

1つは、われわれは明治大学の教員であるという性格、もう1つは、われわれは教職課程の教員であるという性格である。われわれは教職課程の教員であり、かつ明治大学の教員である。それは、たとえば、英文の教員であり、明治大学の教員というのとは、根本的に違うのである。というのは、教職課程の主たる任務である教員養成は、文科省の認可を必要とするが、英文学の研究は必要としないのである（大学設置のときは、文科省の認可を必要とするが、認可の意味内容が根本的に異なっている）。こう見てくると、教職課程は文科省の認可事業と考えてよい。認可事業を推進する学内の部署が教職課程なのである。教職課程は、学内的には、付属物という意識がある。だから、大学が新しい学部を設置するたびに、審査を受けるが、学部の教員は痛痒を感じない。だから、新しい学部の趣意書の中の「取得可能な資格」の所に「中等学校の教員資格」とあると書いてあるのを見て、私は「教職課程に相談もなく、勝手によく書いてくれるよ」と思う。付属物だから、相談しなくてもいいのだという雰囲気がある。ここに差別意識が存在する余地があるのではなかろうか（差別意識の問題は別に述べる機会があろう）。

私が、教職課程の教員は、放送局の社員と同じく認可された課程の教員であると強く意識したのは、2011年6月17日（金）に、文科省を主体として実施された「教職課程認定大学視察」であった。「視察」は、かつてヨーロッパ封建領主が大学に対して行った「監査」（Revision）と同じではないかと思った。主な監査事項は、大学の歴史に即して言えば、①大学についての全般的印象、②大学の組織、③資金運用、④共同食卓、⑤奨学金制度、⑥研究所、⑦教師の数、⑧学生の数、など大学の全般にわたっていた。

「視察」では、大学としての教員養成への取り組みの姿勢、全学的な教員養成のための機能があるか否か、各学部のとり組み、シラバスの書き方、施設、図書館など教員養成にかんする全般が見られた。監査になぞらえた所以である。視察員は、学問的レベルは二流三流であっても、政治権力を背景に視察した。現行日本国憲法では、たしかに大学には「学問の自由」があるが、他方認可事業である「教員養成」はこういう視察を受けるのである。われわれ教職課程の教員は、大学の教員としては、学問の自由を持っているが、教員養成の教員としては、視察を受ける。一方では自由であり、他方では視察される。学問の自由と視察は、どう考えても、調和するものではない。

こういう事実を考慮に入れると、学部の教員と違って、われわれ教職課程の教員は二重の性格を持っていると言わざるを得ない。

主任も大学の位置づけが、文学部の他の専攻の主任とは、全く異なっている。教職課程主任

と教職課程では呼んでいるが、手当は付かない。付けようとする動きもあったが、実現していない。手当が付かないので、教育実習のコマを主任に付けてバランスをとっていたが、それも三上主任までで、それ以降の主任には付いていない。

○ 教職課程主任の性格

主任と言っても、他の教員の同意によってなるのだから、特別な権限を持っているわけではない。人事権を持っているわけでもない。物事の決定権を独占しているわけでもない。ほかの教職課程の教員と同じく提案権を持っているに過ぎない。主任とは言っても、ヨーロッパ大学史で言う「同じ権利を持っている者の筆頭者」(primus inter pares)に過ぎないのである。江戸時代の老中も月番であった。同じ時代の長屋で言えば、月番みたいなものである。教職課程主任は、大学の正式の役職はないから、手当も付いていない。かつては、教育実習のコマがたくさんあって、その大部分を主任につけていた。主任手当の代わりという訳である。にもかかわらず、何も改革しなかった人もいる。だから、主任とは、教職課程で言っているだけで、大学では何も特別な存在ではない。そう考えた方が実態にあっている。

しかし、何か問題が起こると、他の専攻の先生方や教職課程の先生方から、まず相談がある。問題によっては個人的に解決することもあるが、さもないと、教職課程のメンバーに相談するかして、解決をはかる。個人的に判断するかメンバー全員に相談するかの判断は主任がしなければならない。だから、現在では差別発言になるが、「教職課程の小使いさん」と自嘲気味に言った人もいる。

戦後の教職課程主任をつとめた人を時系列的に述べれば、三木寿夫、野邊忠郎、岸本弘、北田耕也、菅原徹、三上昭彦、別府昭郎、高野和子、齋藤孝（現在）となっている。これは、戦後の教職課程の歴史を主体的に担ってきた人々と大部分合致しているが、完全には一致しているわけではない。在任期間の長短はあるが、好むと好まざるとを問わず、主任という役職をこなしてきた人々である。

私が主任であったとき教職課程で起こった問題は、教職課程で解決するという方針で事に当たった。学部長や学長の力をかりないで、解決する。そうしないと教職課程は問題解決力がないとみられるからである。外部はそう見る、判断する。だから私の時はすべて教職課程内で解決した。

○教職課程における私の職責と悩み

教職課程の教師は、2つの課題を果たすべく運命づけられていると私は思っている。1つは、教育職員免許法に規定された課目（教職入門、道德教育の理論と実践、教育史、教育実習など）を担当すること、自分の専門の学問分野を研究すること、この2つである。

教職課程の教員であるから、第一の課題だけで、教育職員免許法に定められた科目を担当すれば、給与が出て、飯は食える。一応の職責を果たしたことにはなる。だから、第一の立場に徹して、第二の立場を考えないでいることもできる。しかし、私は上記の2つの課題を果たすことを自分に課した。そこで、問題は、当然のことながら、専門の学問領域と担当している講義領域とは、如何なる関係に立っているかということに悩まざるを得なかった。

第二の問題から説明しよう。

専門の研究を遂行していて抱えた悩みの1つは、苦しみも喜びも悲しみもある自分の心の現実存在と遠い国の古い時代に起こった大学史上の出来事とが、どうしてもしっかりと結びつかない、乖離しているという悩みである。私の悩みは深かった。今でもこの悩みは完全には払拭しているとはいいがたいが、この悩みを大きく軽減してくれる契機が2つあった。

決定的な契機の1つは、丸山眞男の『戦中と戦後の間』に収められている「日本における自由意識の形成と特質」を読んで、「ああ、こういうふうに、外国で起こった歴史的事実を自分の主体的価値観で解釈してもいいんだなあ」ということを学んだことだった。この文章だけにとどまらず、他の箇所にも教えられるところがたくさんあった。それから丸山眞男の書物は手放せなくなった。私は、偉大な政治思想史家に私淑することによって悩みが非常に軽くなったのである。

もう1つの契機は、私自身の経験である。明治大学に奉職してから40年以上も経過しており、大学教師としての経験も積んできているので、ドイツ大学の歴史的事実を通して、歴史的事実を意味づけ、現代の問題と歴史的事実とを関連づけ重層的に考えることができるようになってきていると思う。しかし、かと言って、自分の心とドイツ大学史上の事実とが全面的にしっかりと調和を保っているという実感はもっていない。ただ、自分を軸にして、外界の出来事を意味づけ、位置づけ、それを解釈して、それらをまとめて歴史像を描いていけば、十分とは言えないが、それなりに提示できるものを作り出すことができるのではないかとは思えるようにはなっている。

もう1つの問題・悩みは、上記のことと無関係ではないが、明治大学教職課程に就職して、大学史とは全く重ならない教育職員免許法に定められた科目を担当しなければならないことであった。ここでは、専門としているドイツの大学史と担当科目との分離・分裂ということを経験した。専門に研究しているドイツの大学史と給与のために講義している教職科目との関係に悩んだ。1人の人間がやるのだから、何らかの関連はあるのだろうが、現在の自分でもよく分かっていない。ただ、大学史で学んだ学問的方法を講義科目の準備をするときに適用している自分を見いだすとき、両者は無関係ではないなと思う。とはいえ、自分の体験に自信はもてない。

こういう問題で頭を悩んでいるとき、高校時代から親炙してきた森鷗外の手紙で次の言葉をみ

つけた。「いかにして人は己を知ることを得べきか。省察を以てしては決して能はざらん。されど行為を以てしては或は能くせむ。汝の義務を果さんと試みよ。やがて汝の価値を知らむ。汝の義務とは何ぞ。日の要求なり。」(Wie kann man sich selbst erkennen lernen? Durch Betrachten niemals, wohl aber durch Handeln. Versuche, deine Pflicht zutun, und du wirst gleich, was an dir ist. Was ist deine Pflicht? Die Forderung des Tages.)。これは鴎外が『妄想』に引用しているゲーテ詞(ことば)である。自分の体験とこの言葉で一応踏ん切りをつけることができた。教職課程の講義の日は講義の準備、講義のないときは大学史というように「日の要求」に従ってやっていたと思った。必ずしもこの詞通りに実行したわけでもなく、電車のなかで講義のためのノートを開くこともあったが、おおむねゲーテの言葉通りにした。

こうして私は、心の安定を一応得ることができた。

○大学教育では、歴史感覚、思想的訓練が大切

私は、大学教育では、歴史感覚、思想的訓練、この二者をキチンと伝える教育が大切と思っている。両者一致していれば言うことはない。

歴史は自己を相対化してくれる。思想的訓練は、自己責任で物事の善し悪しを判断する能力を養う。しかし、難しいことではあるが、私は両者の一致を目指したい。

1つの事例を挙げよう。私は「道德教育の理論と実践」という科目で明治の人物竹越与三郎の新日本史の一節「挙国震驚(しんきょう)、人心擾々の中より、先ず霞のごとく、雲のごとく、幻然として現出せるものは「日本国家」なる理想なりき。幾百年間英雄の割拠(かつきょ)、200年間の封建制度は、日本を分割して、幾百の小国たらしめ、小国をして互いに藩屏閥所を据(す)えて、相(あい)猜疑(さいぎ)し、相敵視せしめたれば、日本人民の脳中、藩の思想は鉄石のごとくに堅けれども、日本国民なる思想は微塵(みじん)ほども存せず。これがために日本全体の利益を取って、一藩の犠牲とせんとする者少からざりき。士人識者にして己にかくのごとくなれば、商売農夫に至っては、殆んど郡の思想あるに過ぎず。概していえば、愛国心なるものは、殆んど芥子粒(けしつぶ)ともいうべく、形容すべからざる微小なるものにてありき。然(しか)れども米艦一朝(いっちょう)浦賀に入るや、驚嘆恐懼の余り、舟を同(おなじゆ)うして風に逢えば吳越も兄弟たりというがごとく、夷(い)敵(てき)に対する敵愾(てきが)の情のためには、列藩の間に存ずる猜疑、敵視の念は融然として掻き消すがごとくに滅し、三百の列藩は兄弟たり、幾百千万の人民は一国民たるを発見し、日本国家なる思想ここに油然(ゆうぜん)として湧き出(い)でたり。」を教材として提示した。歴史的感覚を養うねらい・意図である。と当時に「愛国心とは、明治以降、人為的に作られたものである」という「思想教育」をしようと思っていた。

ある学生が「『愛国心は作られたものだ。』という言葉が今でも心に残っています。」と書いてきたときには、うまく僕の意図は通じたと思った。しかし学生のなかには受信感度のいい学生もいれば、全く感度の悪い者もいるという事実もわきまえておかねばならない。

○大学はギルド

友人が「どうしておまえはあくせく論文をかいたり、本を出版したりするのだ？」と聞いたことがある。たしかに私はアルコールの席も余り行かない。碁も打たない。将棋も指さない。ゴルフもしない。パチンコもしない。楽しみと言えば、近くにあるフィットネスクラブ「アレックス」に週3～4回通って運動（バイクをこぐ、ハイプリーをやる、スクワットをする）をするか、明治大学学生サッカークラブ部の応援に週1回行くくらいである。私は、大学はギルド（大学は大ギルド、学部は中ギルド、教職課程は小ギルド）であって、ギルドのメンバーたる者は常に存在証明をしなければならないと考えている。だから存在を証明するために、論文をかいたり、本を出版したりするのだ。他のメンバーのことをトヤカク言うつもりはない。価値観は多様であり、大学史を学んだ私一人の考えなのだから。

○教職課程の仲間に助けられた

教職課程では色んな組織を作ったり、いくつかの書類の形式も作ってきた。中でも鮮烈に記憶に残っているのは、全国私立大学教職課程教育研究連絡協議会の事務局長を引き受けたり、GPを取ったり、校長・教頭会を立ち上げたり、教育会を立ち上げたりしたことである。そのとき教職課程の仲間にたくさん助けてもらった。全国私立大学教職課程教育研究連絡協議会の事務局長を引き受けた時には伊藤直樹さん、GPを取ったときには佐藤英二さん、教育会の趣旨を検討する時には高野和子さん、設立総会の記念講演には齋藤孝さん、前半の司会には伊藤直樹さん、後半の司会には佐藤英二さん、そして副事務局長として高野和子さんと資格課程事務局長の高橋美子さんをお願いした。

こうしてみると、主任が一人でやることは限られていて、全員で助け合ってやらなければ、うまくいかないことが分かる。これまでとは違う新しい要素を入れようとすれば、「全員の同意」（consensus omnium）と行動が必要であることが分かる。

○不可能を可能にする

なんだか週刊誌みたいな題名をつけたが、どうしても言っておきたいことがある。不可能を可能にもってくるとのことである。映画の話になって恐縮であるが、「パットン大戦車軍団」という映画に次のようなシーンがある。イギリスの参謀が「モンゴメリー将軍はそれは不可能と言うでしょう。」、するとパットンが「モンゴメリー将軍はこれまで不可能を可能にかえた

ことがないからな」という名ぜりふがある。

これと全く同じことを教育会の創設するとき経験した。僕より先に主任をした人に、「あなた達が作っておいてくれたら、俺は苦勞して作らなくていいではないか」と言ったら、その人は「不可能と思った。」と言った。僕は、事務室、学長スタッフ、理事会、教職課程 OB と話し合いを続けて、2008 年 11 月 15 日に「教育会」をたちあげた。そのときパットンの名ぜりふを思い出した。

○ 明治大学教職課程の権能

明治大学教職課程は、現在 9 人の専任教員（特任教授 1 名を含む）から成り立っている。教職課程は、日本国憲法、教育基本法、学校教育法、教育職員免許法など、教育に係わる様々な法令に立脚して運営されているが、とりわけ教育職員免許法に基づき、開放制教員養成を行い、学部とは異なる独自のカリキュラムを組み、発表している。

現在、明治大学出身の教師は、現職で約 5000 名に達し、退職者も含めると約 8000 名になると言われている。

2008 年 11 月 15 日には、明治大学出身教育関係者の人的ネットワークである『明治大学教育会』（名誉会長 本学学長納谷廣美）が結成され、本学出身の教育関係者と本学とを関係づけた。これによって、教育研究者と教育実践家との不幸な対立が、明治大学では、融合すればと思っている。

明治大学は、大学全体として、資格課程委員会（委員長教務部長）を設置し、教職、社会教育主事、学芸、司書・司書教諭の各課程の専任教員がそのメンバーとなり、明治大学の名前で授与する資格に責任をもっている。端的に言えば、教職課程は、本学の教員養成に責任を持っている部署である。その教職課程は以下の権能を持っているというのが、教職課程教員全員の共通認識である。

- 1 教育職員免許法に基づき、独自のカリキュラムを組む。
- 2 それら科目の試験を実施し、成績評価を行う。
- 3 科目等履修生の選抜を実施する。
- 4 教育実習や介護等体験を実施する条件を設定する。
- 5 教員免許状を一括申請し、授与する。
- 6 その他、教員養成に係わる個々のケースを審議し、決定を下す。

○ 教職課程人事の原則

教職課程は専任 8 人と特任教授 1 名の計 9 名から成り立っている。定年退職や途中退職などで欠員が来ると、当然の事ながら人事をしなければならない。このばあい私たちは、相互に

関係する 2 つの原則をたてた。1 つは今居る専任よりも若い人を選ぶこと。もう 1 つは、どこかの大学を定年で辞めた人は取らないこと。この 2 つである。2 つ目の原則は、隠居仕事で来られては他の者が迷惑するし、若い人を育てる意味で、今でも守られている。1 つ目は、必ずしも原則通りにいかないところもあるが、おおむね守られている。毎年 18・19 歳が確実に入ってくるのに、教員は確実に歳を取っていく。若い人が必要な所以である。

年齢層は、色んな学生に対応できるから、多様な方がいい。だからこういう原則をつくるのも、知恵だと思っている。

○教職課程でやり残したこと

自慢話と受け取って貰うと私の本意とは全くかけ離れて困ったことになってしまうが、私は教職課程で自分が出きることは実現できるように努力してきたつもりである。校長・教頭会の創設、採用試験準備講座の設置、大学院の創設、全国教職課程連絡研究協議会の事務局長、GP の取得、教育会の創設などに手を染めてきた。その際できるだけ教職課程の仲間や学長スタッフと理事会、事務室を巻き込むように心がけてきた。全学的組織にした方がいいと思ったからである。とくに校長・教頭会や教育会はそうだった。教育会は、学長スタッフや理事会、資格課程事務室という学内のみならず、学外の OB・OG の教員を巻き込む大がかりな組織となり、それなりに満足している。現在教職課程で使用している書類にも私が始めたことがいくつかある。しかし、私はやり残した仕事があつて心残りである。それは、「教職課程の歴史」を作れなかったことである。

「教職課程の歴史」にかんしては、1999 年に教職課程 50 周年を迎えたので、メンバーの声もあり、50 年史を作ろうと思った。プロットを作り、担当を決め、案として研究室会議にかけ、議論したところ、教職課程で最も年齢の高い人から「資料を揃えて目の前に出せ。東京都の教育の歴史を書くとき、資料を揃えて出された」と言われたので、「あなたはお客さんではない。教職課程そのものではないか」と反論した記憶がある。結局その場では決めきれず、うやむやになってしまった。当時の資格課程事務長から、「先生、気をつけないと、足を引っ張る人がいますから」と言われたのが記憶に残っている。結局教職課程の歴史として残っているのは、私が人文研の紀要にかいた「明治大学における教員養成の歴史」と「文学部 75 史」の「教職課程の歴史」という略史しかない。

心残りである。

Ⅱ 行く末

私は酔生夢死というような生涯は送りたくない。では、どう生きるか。オシムは言っている「自分にサッカー以外のことができるであろうか」と。私も「大学史以外にできることがある

だろうか？」と自問してみると、大学史以外になさそうだ。

大学史の研究には、煩瑣をいとわぬスコラ哲学的な「粘り」が必要である。いままでの経験でしっている。今後も私は粘着力をもって、魯鈍にむち打ちながら、ドイツ大学史にかんする研究を続けていきたいと思っている。少なくともそういう気力だけは維持してゆきたいと思っている。

退職した後にしたい仕事、いくつかやり残した重要な仕事がある。

- ①1982～1983 年にミュンヘン大学で研究生活を送ったときコピーしてきた「ドイツ大学新聞」(Akademische Monatsschrift.(Deutsche Universität-Zeitung, 1849－1897)を分析して、叙述すること、
- ②これまで集めてきた講義目録 Vorlesungsverzeichnis (インゴルシュタット、ハイデルベルク、ゲッティンゲン、ヴィーン、ハレ、ベルリンなど)を分析する、
- ③戦後のドイツ各大学の講義目録を整理し、分析すること。実物がある。(これは「ミュンヘン大学文書館」で捨てられそうになっていたのを、私が選んでスモルカさんから日本に送ってもらったものである。)
- ④プロイセン文部省の Zentralbat (1859～1905)を分析すること。全部コピーしてある。
- ⑤クリスティアン・ヴォルフの研究をしたくて、全集が揃っている。